

女子新修身 卷二

4b
110
023



40578

教科書文庫

4
110
42-1928
20000
65493

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

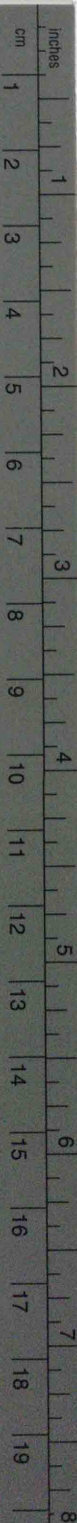


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak

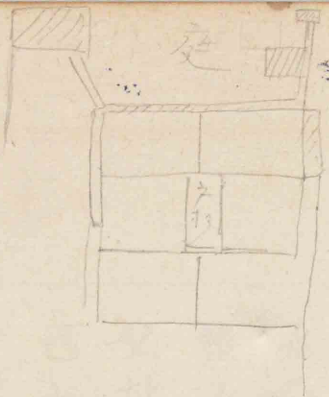


昭和三年三月三日
文部省檢定濟

文學博士服部宇之吉著

女子新修身

東京金港堂書籍株式會社



豊葦原の千五百秋の瑞穂國は
是れ吾が子孫の王とますべき
地なり爾皇孫就て治らせさき
く寶祚の隆えまさんこと天壤
と與に窮なかるべし

①一度のみと心を許すと云ふに
悪習の第一歩が始る

今日一日
一年の縮圖なり

②悪習の要
母子一如
父子一如
親友一如
陰我精進

立て
倒れを
立て

③待て事
知るは
成功の
入神法なり

又倒れても
又立て

④一日といへば
一歩といへば
一歩といへば

何度倒れても立て
子どもはこうして立つことよおぼへる
大人も亦然なり

勅語

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ徳ヲ
樹ツルコト深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億
兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國
體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス爾臣民
父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉
己レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ
智能ヲ啓發シ徳器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ
開キ常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義

勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ如キハ獨リ朕カ忠良ノ臣民タルノミナラス又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン
斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ俱ニ遵守スヘキ所之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス朕爾臣民ト俱ニ拳々服膺シテ咸其德ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ

明治二十三年十月三十日

御名 御璽

詔書

朕惟フニ方今人文日ニ就リ月ニ將ミ東西相倚リ彼此相濟シ以テ其ノ福利ヲ共ニス朕ハ爰ニ益國交ヲ修メ友義ヲ悖シ列國ト與ニ永ク其ノ慶ニ賴ラムコトヲ期ス顧ミルニ日進ノ大勢ニ伴ヒ文明ノ惠澤ヲ共ニセムトスル固ヨリ内國運ノ發展ニ須ツ戰後日尙淺ク庶政益更張ヲ要ス宜ク上下心ヲ一ニシ忠實業ニ服シ勤儉產ヲ治メ惟レ信惟レ義醇厚俗ヲ成シ華ヲ去リ實ニ就キ荒怠相誡メ自彊息マサルヘシ

抑我カ神聖ナル祖宗ノ遺訓ト我カ光輝アル國史ノ
成跡トハ炳トシテ日星ノ如シ寔ニ克ク恪守シ淬礪
ノ誠ヲ輸サハ國運發展ノ本近ク斯ニ在リ朕ハ方今
ノ世局ニ處シ我カ忠良ナル臣民ノ協翼ニ倚藉シテ
維新ノ皇猷ヲ恢弘シ祖宗ノ威德ヲ對揚セムコトヲ
庶幾フ爾臣民其レ克ク朕カ旨ヲ體セヨ

御名 御璽

內閣總理大臣副署

明治四十一年十月十三日

詔書

朕惟フニ國家興隆ノ本ハ國民精神ノ剛健ニ在リ之
ヲ涵養シ之ヲ振作シテ以テ國本ヲ固クセサルヘカ
ラス是ヲ以テ先帝意ヲ教育ニ留メサセラレ國體ニ
基キ淵源ニ遡リ皇祖皇宗ノ遺訓ヲ掲ケテ其ノ大綱
ヲ昭示シタマヒ後又臣民ニ詔シテ忠實勤儉ヲ勸メ
信義ノ訓ヲ申ネテ荒怠ノ誠ヲ垂レタマヘリ是レ皆
道德ヲ尊重シテ國民精神ヲ涵養振作スル所以ノ洪
謨ニ非サルナシ爾來趨向一定シテ效果大ニ著レ以
テ國家ノ興隆ヲ致セリ朕即位以來夙夜兢兢トシテ

常ニ紹述ヲ思ヒシニ俄ニ災變ニ遭ヒテ憂悚交至レ
輓近學術益開ケ人智日ニ進ム然レトモ浮華放縱ノ
習漸ク萌シ輕佻詭激ノ風モ亦生ス今ニ及ヒテ時弊
ヲ革メスムハ或ハ前緒ヲ失墜セムコトヲ恐ル況ヤ
今次ノ災禍甚タ大ニシテ文化ノ紹復國力ノ振興ハ
皆國民ノ精神ニ待ツヤ是レ實ニ上下協戮振作更
張ノ時ナリ振作更張ノ道ハ他ナシ先帝ノ聖訓ニ恪
遵シテ其ノ實效ヲ舉クルニ在ルノミ宜ク教育ノ淵
源ヲ崇ヒテ智德ノ竝進ヲ努メ綱紀ヲ肅正シ風俗ヲ

匡勵シ浮華放縱ヲ斥ケテ質實剛健ニ趨キ輕佻詭激
ヲ矯メテ醇厚中正ニ歸シ人倫ヲ明ニシテ親和ヲ致
シ公德ヲ守リテ秩序ヲ保チ責任ヲ重シ節制ヲ尙ヒ
忠孝義勇ノ美ヲ揚ケ博愛共存ノ誼ヲ篤クシ入りテ
ハ恭儉勤敏業ニ服シ産ヲ治メ出テテハ一己ノ利害
ニ偏セスシテ力ヲ公益世務ニ竭シ以テ國家ノ興隆
ト民族ノ安榮社會ノ福祉トヲ圖ルヘシ朕ハ臣民ノ
協翼ニ賴リテ彌國本ヲ固クシ以テ大業ヲ恢弘セム
コトヲ冀フ爾臣民其レ之ヲ勉メヨ

御名御璽
攝政名

大正十二年十一月十日

國務各大臣副署

勅語

朕皇祖皇宗ノ威靈ニ頼リ萬世一系ノ皇位ヲ繼承シ
帝國統治ノ大權ヲ總攬シ以テ踐祚ノ式ヲ行ヘリ舊
章ニ率由シ先徳ヲ聿修シ祖宗ノ遺緒ヲ墜ス無カラ
ンコトヲ庶幾フ
惟フニ皇祖考叡聖文武ノ資ヲ以テ天業ヲ恢弘シ内
文教ヲ敷キ外武功ヲ耀カシ千載不磨ノ憲章ヲ頒チ
萬邦無比ノ國體ヲ鞏クセリ皇考夙ニ心ヲ養正ニ宅
キ廼チ志ヲ繼明ニ尙クス不幸中道ニシテ聖體ノ不

豫ナル朕儲貳ヲ以テ大政ヲ攝ス遽ニ登遐ニ遭ヒテ
哀痛極リ罔シ但皇位ハ一日モ之ヲ曠クスヘカラス
萬機ハ一日モ之ヲ廢スヘカラス哀ヲ銜ミ痛ヲ懷キ
以テ大統ヲ嗣ケリ朕ノ寡薄ナル唯兢兢業トシテ負荷
ノ重キニ任ヘサラシコトヲ之レ懼ル

輓近世態漸ク以テ推移シ思想ハ動モスレハ趣舍相
異ナルアリ經濟ハ時ニ利害同シカラサルアリ此レ
宜ク眼ヲ國家ノ大局ニ著ケ舉國一體共存共榮ヲ之
レ圖リ國本ニ不拔ニ培ヒ民族ヲ無疆ニ蕃クシ以テ

維新ノ宏謨ヲ顯揚センコトヲ懋ムヘシ

今ヤ世局ハ正ニ會通ノ運ニ際シ人文ハ恰モ更張ノ
期ニ膺ル則チ我國ノ國是ハ日ニ進ムニ在リ日ニ新
ニスルニ在リ而シテ博ク中外ノ史ニ徵シ審ニ得失
ノ迹ニ鑒ミ進ムヤ其ノ序ニ循ヒ新ニスルヤ其ノ中
ヲ執ル是レ深ク心ヲ用フヘキ所ナリ
夫レ浮華ヲ斥ケ質實ヲ尙ヒ模擬ヲ戒メ創造ヲ勗メ
日進以テ會通ノ運ニ乘シ日新以テ更張ノ期ヲ啓キ
人心惟レ同シク民風惟レ和シ汎ク一視同仁ノ化ヲ

宣へ永ク四海同胞ノ誼ヲ敦クセンコト是レ朕カ軫
 念最モ切ナル所ニシテ丕顯ナル皇祖考ノ遺訓ヲ明
 徴ニシ丕承ナル皇考ノ遺志ヲ繼述スル所以ノモノ
 實ニ此ニ存ス有司其レ克ク朕カ意ヲ體シ皇祖考暨
 ヒ皇考ニ效セシ所ヲ以テ朕カ躬ヲ匡弼シ朕カ事ヲ
 獎順シ億兆臣民ト俱ニ天壤無窮ノ寶祚ヲ扶翼セヨ

女子新修身卷二目次

第一課	過去一年を顧みて……………	一
第二課	先づ考へよ……………	五
第三課	失敗の教訓……………	一〇
第四課	自治の精神……………	一五
第五課	協同……………	二〇
第六課	同情……………	二五
第七課	我が父母……………	三〇
第八課	我が師……………	三五
第九課	感謝と奉仕……………	四〇
第十課	寛い心……………	四九

第十一課	自然に親め……………	五
第十二課	實力を養へ……………	六
第十三課	生きた學習……………	六
第十四課	勤勉努力……………	七
第十五課	挫けぬ心……………	七
第十六課	過を速に改めよ……………	八
第十七課	習慣……………	九
第十八課	小事と大事……………	九
第十九課	明い心……………	一〇
第二十課	誠……………	一〇

女子新修身 卷二

第一課 過去一年を顧みて

過去一年の生活の反省

私達は幸に過去一ケ年の學生生活を無事に終つて今第二學年に進むことが出来ました。私達が多少の不安と包みきれないうれしさをもつて此の學校に入學したのは昨年の今頃でした。爾來滿一ケ年の間諸先生の懇切にして熱心なる御指導により、幸に大きな過もなく勉學に、運動に、又修養にいそしんでまゐりました。

今や第二學年に進んで學科の程度も次第に高くなり、科

勉學修養上の反省

目の數も亦多くなり、昨年よりは一層努力せねばなりません。然し顧みて過去一ケ年の私達の學校生活には何の遺憾もなかつたでせうか。勉強にぬかりが無かつたでせうか。豫習復習を怠つてまごついた事はなかつたでせうか。學科の好き嫌ひに依つてなまけた所はなかつたでせうか。心から私達の將來を思ひ、私達を懇篤に導いて下さる先生方の教訓や修身の教を、身にしみて考へて見たでせうか。時にわかり切つた事つまりぬ事として、おろそかにした事はなかつたでせうか。うかくと誘惑されて恐ろしい途に踏み迷はうとした事はなかつたでせうか。自分の身分や家の事も考へずに人前を飾つたり、無駄費をしたりしな

健康上の反省

かつたでせうか。或は又徒に他人の幸福をうらやんで、自分で自分の心を暗くする様なことはなかつたでせうか。又私達の健康状態はどうであつたでせうか。衛生に注意が缺けたり、節制を怠つたりして健康をそこね、ために學業も思にまかせず、親兄弟にも心配をかけたやうなことはなかつたでせうか。積極的に身體の鍛錬に努め、健康の基礎を築いて來たでせうか。

團體生活の反省

更に私達は學校の校規校則を十分に守つて來たでせうか。團體生活といふものを本當に理解して益々我が學校の校風を發揚し、我が級の成績を上げるように努めて來たでせうか。或は校規校則に従ひ先生の教訓を守るにして

一層の緊要努力

も、いや／＼従ふといふことはなかつたでせうか。
 かやうに振り返つて考へて見ると遺憾な點も少くありません。まだ／＼眞劍味の足りない所、努力の至らない所が多くあります。私達は今新學年の最初に當つて過去一年の反省の上に一層堅い決心とまごころをもつて進みませう。殊に昨年私達が此の學校に入學した際には學校の様子もわからず不安があつたので何事にも緊張して居り、好ましからぬことも堪へ忍び、苦しいことにも耐へて努めて來たのですが、今や漸く團體生活にも慣れ、學校の様子もわかつて來たのでやゝもすると心が弛み間違が生じ易いので、特に堅忍不拔の精神をもつて一時の安逸を貪る心

を去らねばなりません。明治天皇の御製にも

事なしとゆるぶ心はなか／＼に

仇あるよりも危かりけり

と仰せられました。油斷は私達の修養向上に取つて最大の敵であります。

又私達はこの春からは新入生に對しては上級生として世話をしなければならぬ身の上です。昨年の春私達が入學した當時の事を偲び親切に世話をして上げませう。そして又上級生として恥づかしくない様に行動しませう。

新入生に對して

第二課 先づ考へよ

思慮の必要

考へるといふことは人間だけが持つてゐる力であり、これが人間を萬物の靈長たらしめる力である。私達は何事をなすにも先づ其の事柄の性質についてよく考へ、豫め之を行ふ順序方法をよく考へねばなりません。何の考もななく輕卒にその事に當る時は、意外の失敗を招いたり、笑ふべき間違を生じたりすることは、私達の常に經驗する所であります。

勉學と思慮

私達の日々の課業に就て之を考へて見ても、數學の如きは其の問題の性質や之を解くために用ふべき公式などに就て十分考へた上に手を下さないと、折角解き得る問題も解けずに終ります。作文の如きも先づ全體の結構を考へ、

書くべき事柄の大綱を考へ、十分腹案が立つてから筆を取らなければ中途で意塞り語つかへて到底達意の文章を作ることとは出来ません。又お裁縫の際などには十分考へてから仕事にかゝらないと、斷つてしまつてから使途のない小布コフを作つたり、寸尺が合はなかつたりしてまごつかなければなりません。

修養と思慮

私達の一般の修養についても亦同様です。思慮分別の足りない人は事の善惡を十分に考へないので、自分ではそれほど悪い事とは氣付かないで過を繰返し、次第に自分の品性を墮落させて行きます。かのもとくさほど悪くもなかつた少年少女が、不良の徒輩に誘はれて思はずその方

に傾き、遂に動きのとれないやうになることが屢々あるのは、一には意志が弱いためですけれども、又その始、思慮の足りなかつたことが大きな原因だと言はねばなりません。又思慮の足りない人は周囲の人々に對してもふとした無分別から心にもないことを言つたり、或は對手の境遇や事情も考へずに自分勝手に行爲をしたり、言ふまじきことを言つたりします。そのために誤解を招き人の感情を害ね、往々年來の友情まで失ふやうな事があります。又手に鉛筆や白墨があると知らず、樂書をしたり、人の前で作法な言葉遣をしたり、謹むべき儀式などの場合に不謹慎の言動をなしたり、室の出入に戸を明け放しにしたり、窓下に

特に思慮の必要な場合

反古を投げ棄てたりするやうなことは、一寸考へればすぐわかることであるのに幾回も繰返し同じ注意を受ける者があります。これも明に不注意であり、思慮が足りないやうであります。

平生事に當つて考の足りない不注意の人は、急ぎの場合や感情に激した場合などに特に注意が必要です。殊に女子はとかく感情に驅られ易いものですから、興に乗じたり、怒に燃えたり、嫉妬の念に驅られたりして判断を誤らないやうに心掛けねばなりません。さもなければ一時の感情のために終生拭ふことの出来ない、失敗を招くことがあります。

流行と思慮

特に女子の強く考へねばならないのは流行についてであります。流行は必ずしも合理的にあらはれるものではなく、然も思慮分別の乏しい人を捉へる力の非常に強いものです。模倣心の強い者や、虚榮心をそゝられ易い者はすぐ低級な流行に捉はれます。今の社會を見廻はして見ても私達の徳性を傷け品位を墮すやうな輕佻浮薄な低級な流行が少くありません。心せねばなりません。

遠キ慮ナケレバ必ズ近キ憂アリ。(論語)

第三課 失敗の教訓

失敗の後の成功

砲手が大砲を發射する時、若し第一彈にして的に中らな

失敗は人生の常

ければその誤差を按じて第二彈を發し、又中らない時は更にその誤差を按じて第三彈を發し、かやうにして一回毎に次第にその誤差を減じて遂に命中するに至ります。私達の勉學にも同じやうな場合が少くありません。例へば數學の難問を解くやうな場合には、先づ或る方式によつて解答を試みて出来ない場合には、熟考して其の誤を見出し、更に別の方式を擇んで正解に達するまでやります。又理科の實驗などでは、幾回も失敗を重ねて後に始めて成功することは常に私達の經驗する所です。

私達の歩む途には至る所に失敗が横つてゐます。もとより失敗は私達の望む所ではないが、何でも絶対に失敗の

ハルトマン
(西曆一八四
二—一九〇六)
獨逸の哲學者

ないといふことは望む可らざることでありませぬ。ハルトマンは「人生は失敗の歴史」であるときへ言つてゐますが、一面の眞理であります。言ふまでもなく私達は常に慎重な態度で事に當り失敗せぬやうに注意せねばなりません。が、若し一言一行唯失敗あらんことばかりを怖れては、何事も引込思案になり進んで事に當ることが出来ませぬ。風吹く小枝に巢を張る蜘蛛の努力はまことに私達人生の姿であります。どんな人でも多かれ少なかれ失敗の経験を嘗めない人はありません。古來大成功家といはれ大事業を完成した人々の歩んだ途を考へて見ますと、決して平坦な道をすらく歩いてゐるのではなくて、幾度となく失

失敗は成功の
基礎

パリツシー
(西曆一五一
〇—一五八九)
佛蘭西の陶工
にして畫家

敗に失敗を重ねて後に漸く成功した者が多いのであります。そしてそれ等の人々に取つては、始めの失敗が後の仕事の教訓となり、成功の基礎となつてゐるのであります。

陶工パリツシーは陶藥の發明に殆ど十六年の歳月を費しました。その長い年月の間に幾度か繰返されて殆ど失敗に歸した様に思はれた幾百回の實驗が、實は最後の成功の基礎となつたのであります。名優九代目團十郎が未だ權十郎と名乗つてゐた時分には、その師からは到底名優になれる資格なしといはれ、觀客からは「大根」と嘲笑罵詈されました。けれども彼は決して其の志を挫くことなく、却つて之を激勵の聲として孜孜として其の道にいそしん

試練をうけよ

だ結果は、遂に日本一の名を贏ち得たのであります。
 向ふ見ずの亂暴と無鐵砲とはどこまでも戒めねばなり
 ませんが、さりとて又徒に失敗を怖れ、一旦の失敗に失望落
 膽してはなりません。徒に失敗を怖れて積極的に進み得
 ない者は、次第に怯懦となり因循姑息に流れ、進んで事に當
 る氣力を失ひ、小い天地に齷齪として一生の間何事も爲し
 得ずして終るの外はないでせう。人はあらゆる困苦缺乏
 に依つて鍛へられ、幾度かの失敗の試練をうけて後にこそ
 眞に底力ある深みのある人間となることが出来るのであ
 ります。

失敗の利用

失敗した時には靜かに失敗の原因を考へ之を利用し、更

自治の精神

に勇を振るつて失敗のなかつたよりも一層多くの効果を
 收めることを考へねばならない。失敗の原因は自分の過
 失にある場合もあり、周囲の事情不慮の事件のために如何
 ともなし難い場合もあります。失敗の原因が自分にある
 場合には、自己反省に依つて之を改めることが出来ます。
 孔子も「過ヲ貳タビセズ」と訓へてゐますが深い自己反省に
 よつて同じ過を繰り返へさない所に失敗の教訓があるの
 であります。

第四課 自治の精神

自分の力で出来ることはみだりに他人に頼らず自分の

手で爲し、又自分の爲すべきことは一々他人の指圖を受けるまでもなく自ら進んで爲すといふ心懸が自治の精神であります。

私達は幼少の間は自分の衣食から寢起まで父母や兄弟の世話になります。が、生長するに従つて自分で出来ることは自分でやる様になります。私達がやがて社會に出て一人前の人として働く場合には、すべて自分のことは自分で處理しなければならぬのであるから、今から常に自分の力で出来ること、自分の爲すべきことは一々人の手を煩はさず自分で片付けて行く習慣を養はなければなりません。勿論今の私達は未だ修養の中途にあるもので経験も淺く

自治的活動の發展

學生の自治活動

知識も少いのです。すべての事を自分の考だけで誤なく片付けて行くことは出来ません。家にあつては父母の監督を受け、他にあつては教師や先輩の指導を仰がねばなりません。然し今の私達にも自分の力で出来ること、人に頼らず自分の力でやるべきことは澤山あります。

先づ自分の身の廻りの事は自分で片付けて行くのが當然です。教科書や其の他學用品の整理とか、自分の衣類の清潔整頓とか、履物の手入れとか、自分の居室の掃除とか云ふやうな事は當然自分の手でやらねばなりません。勉強をするにも自治の精神に富んだ者はいやくやるのでなく又みだりに他人を當にせず自發的に自分の力相應にやつ

團體生活の自治的活動

て行きます。之に反して自治の精神に乏しい者は豫習や宿題の解答にもすぐ他人の力に頼ります。他人に頼ることが或は勞少くして功の多いやうに見えることがありますが、すけれども、さうして得た知識は借物で眞に身につかず、一時胸中を通過するに過ぎません。従つて依頼すべき者がなければ獨りで進むことが出来なくなります。これは決して眞の勉強ではありません。眞の勉強は自學自習であります。かく言へばとて私達が學友の間で相互に助け合ふことが悪いといふのではありません。唯自分で骨を折らないで他に頼らうとする依頼心をいましめるのです。更に私達は團體生活を營んでゐるのですから、團體の活

校規、教訓を守る心がけ

動に於ても亦自治の精神を養ふことに努めねばなりません。例へば我が級の統一和合をはかるとか、進んで我が級の教室の清潔整頓に力を入れるとか、或は學級として割り當てられた仕事を果して行くとか、其の他種々の命令などを取り運んで行く場合などに一々教師の指導命令をうけるまでもなく私達學級のもがお互に力を協せ進んで之を果して行くべきであります。

学校の規則を守るにしても学校の規則だからやむを得ず之を守り又教師の命令であるからやむを得ず之に従ふといふやうな態度は自治の精神を解しないものであります。此の學校は私達の學校です。私達は我が學校を立派

な學校にし、我が學校の體面を保ち、我が學校の校風を發揚して行くために進んで校規を守り教師の命に従ふといふ態度でなければなりません。自分が學校なり學級なりの役員などに選ばれた場合にもお役目でその仕事をやるのではなくて、我が學校のため、我が學級のためと思つて進んでその任務を果すべきであります。

俗語に「三歳兒の魂百まで」と云ひます。私達は今から自治の精神を十分に養つて將來立派な自治國民として働き得る基礎を作らねばなりません。

第五課 協 同

自治と協同

自分のことは自分でするといふ自治の精神と共に忘れてならないものは、お互に助け合ひ共に働くといふ協同の精神であります。自治の精神と協同の精神と相俟つて社會生活の基礎をなすものであります。

自治と協同とは同一の事は両面から見たもの

自治と協同とは切り離すことの出来ない問題であつて、同一の事柄を兩側から見ても考へられます。私達の團體生活にあつて、各自がその團體の性質を十分に考へ、お互が團體の一人であることを自覺して、まごころからその團體の目的を最もよく果すやうに活動するならば、そこに眞の自治の精神と共に協同の精神があらはれて來ます。例へば學校の運動會について考へて見ます。全體

各分擔部分を
果して全體を
完成せよ

の計畫を立てる者、プログラムを作る者、會場を作る者、會場を整理する者、會の進行をはかつて行く者、記録をなす者、報告をする者、賞品を渡す者、其他色々の仕事を分擔する者が共々に力を協せ心を一にして働いて、はじめて運動會が立派に行はれます。協同といふことなしには團體の仕事は出来るものでありません。然し同時に夫々の方面の仕事は分擔する者が進んで自分の仕事を完全に果して行くといふ自治の精神に缺けて居り、お互に他人を頼り、他人にかこつけて自分の責任を免れやうとするのでは、仕事はいつまでたつても捗りません。何事についても同様です。團體生活に於て團體の仕事をすゝめるためには、各自が夫々

偉大なる協同
の力

の仕事に分擔して、そして全體のために互に力を協せ心を同じうしなければなりません。然も仕事の分擔がきまつたならば、自分の分擔は責任をもつて自分の手で果して行き、そして我が團體の仕事は私達の手で完成させるといふ自治の精神がなければ、團體の仕事は出来るものではありません。

協同の力は偉大です。個人には限があるが協同の力は無限です。蟻の生活はよく私達に協同の力の大きなことを教へて呉れます。又私達には誰にでも長所短所があります。私達がお互にその長所を發揮し短所を補つて助け合つて行く所に、全體としてよい成績があげられ、能率

が高められるのであります。唯團體生活にあつては、すべての人が皆自分の希望する仕事を分擔することが出来るものではありません。又その分擔する仕事に輕重があり、難易があります。見榮みはるのする仕事があり、見榮のせぬ仕事があります。これは團體生活の性質上、始から私達が覺悟してゐなければならぬ事です。若し一人でも自分の分擔に不平不満を持ち、責任を重んぜず、其の場遁れの仕事をする様なことがあれば、そこから全體が崩れ始めます。私達は團體の仕事で或る分擔を持つたならば、たとへ其の分擔が重からうと輕からうと、或はあらはれた仕事であらうと隠れた仕事であらうと、決して不平不満を訴へることな

縁の下の力持

く、全體のために喜んで責任を果しお互に力を協せて行かねばなりません。まごころから全力をあげて活動するならば、いかなる仕事を分擔しようと、その活動の價値に差はありません。世に「縁の下の力持ち」といふ諺があります。若しそれが本當に團體の發展のために必要なことであるならば、私達は寧ろ喜んで縁の下の力持ちになる覺悟がほしいものです。

社會生活と同情

第六課 同情

私達の生活はお互に虚偽がない、他人に對して不正をはたらかないといふだけでは足りません。これだけであつ

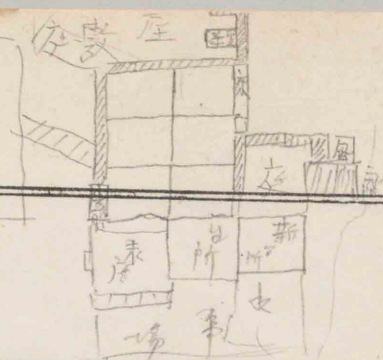
ては、この社會は極めて冷い無味乾燥なものになつて、幸福に酔ふものが笑ひさゞめく傍に、不幸な者は悲の涙に泣き濡れてゐなければなりません。これでは社會生活に何の親みも懷みもありません。私達は更に進んでお互に他人の身を思ひ遣り、我が身を人の位置に置き、人の心を我が心として其の喜憂を共にするといふ同情の念を養はなければなりません。

私達が樂んで社會生活を送り、各々其の本分を盡して行くことが出来るのは、お互に慰めあひ助け合ふて行くからであります。若し人類に同情が無かつたならば、この社會はさながらに弱肉強食の有様となり、私達は安んじて又喜

同情は社會生活に温みをもたらす

んで社會生活を送ることは出来ません。不幸な人、悲しみの人、貧しき人に同情の涙を濺ぐほど麗はしいことはありません。殊にその優しい心榮えは婦人の本性であります。道に迷ふ人に叮嚀に之を教へ、病人を勞り、天災に遭へる者を救ひ、弱き者に力を添へ、泥濘になやむ車に力を藉すやうな類は、皆これ同情の花咲くうるはしい行爲であります。人々のかうしてなさけのこもる心に、いかばかり社會生活に温みや潤ひが出て來ることとせうか。事の大、小にかゝはらずなさけある行爲は見るからに氣持よいものであり、これを受けた對手は口には云へないありがたみを感じるものであります。

同情は人性の自然



長者の萬燈より貧女の一燈

孟子は「惻隱ノ心ナキハ人ニ非ルナリ」と云ひましたが、不幸や難儀を見て、あはれに思ふのは人性の自然であります。この人の本性があらはれて或は親切となり、慈善となり、博愛となるのであります。然るに世の中には、虚榮や奢侈に無用の浪費をしながら、他人の不幸や困苦に少しも心をとめない者があります。少しく出世したとて人に對して横柄に振舞ひ、不運に燻つてゐる舊知故人より知人と云はれるのを恥辱の如くに思ふ者があります。其の心根の陋劣なる誠に憐むべきであります。慈善には恵むべき金錢や物品の多きを望みません。分相應のまごころからの同情、温い涙こそ尊いものです。見

相手の事情を考へよ

えが手傳へばそれだけ同情心が汚れます。「長者の萬燈より貧女の一燈」といふ諺がありますが、まことに味はふべき言葉であります。同情にも亦程度があります。同情の押賣は禁物です。世には往々何事にも口を出し、好んで他人の内事に立ち入つていらざる世話をやく者がありますけれども、これは却つて有難迷惑になつて相手に反感を與へるに過ぎません。又外見につられて事情も考へず是非善惡の辨別もなく、金品を與へるが如きは決して眞の同情ではありません。今の私達の年頃の女子は、とかく安價な涙にさそはれ、感傷的な氣持になり易いものですから、吳々も注意しなければな

博愛衆に及ぼす

りません。

同情の及ぶべき範囲には限りはありません。全人類に及ぼし、更には凡ての生あるものに及ぶべきであります。然し先づ己に近き者より次第に遠きに及ぶが自然の順序であります。我が友達の困苦を見捨てながら、一面識もない他人に涙を濺ぐが如きは、ためにする所あるか、或は空涙であつて眞の同情ではありません。教育勅語に「博愛衆ニ及ホシ」と仰せられたのもこの精神と拜察されます。

第七課 我が父母

私達が今日この世に生を享け、この學校に通ひ、毎日人の

親心

道を學び修養にいそしむことの出来るのは、全く父母の鴻恩の賜物であります。私達が生れ落ちるより一人前になるまで、衣食のことはいふまでもなく、私達の心身のすべてにわたつて深い注意を拂ひ、溢れ出づる慈愛を以つてはぐくみ育てられる親の辛苦は如何ばかりでありませう。太陽の光が絶えず萬物を照し育てる様に、親は片時も私達子供の上を忘れることなく、子供のためにする苦勞を苦勞とせず、却つて自分の満足としてゐるのであります。父母の慈愛は、私達子供を思ふ眞心から溢れ出でる自然の情であつて、全く利害の打算を離れて純粹無垢の愛であります。その叱責の一語にも「我子よかれ」と祈る眞心がこもり、打擲

の拳の裡にも「過なかれ」と祈る温い涙が溢れてゐるのであります。「父母の恩は山よりも高く海よりも深し」といふ古語は決して一片の空語ではありません。吉田松陰が

親思ふ心にまさる親心

今日の音づれ何ときくらん

と詠んだのはこの鴻恩を偲ぶ人の子の至誠のあらはれてあります。

孝養の根柢

私達は之を思ひ、人の子として父母に對して衷心感謝の念を捧げ、誠心誠意其の鴻恩を思ひ、愛敬の誠を致さねばなりません。この心からなる感謝と愛敬の念とより、父母に對する孝養の道が自然に生れるのであります。

父母の意を安んぜよ

先づ父母が私達の上に望む所を十分に考へ、よくその期待に背かないように注意して、父母の心を安んずることが第一であります。父母が其の子供に望む所は夫々境遇や事情によつて異なりますが、學生である今の私達に對して父母の望む所には皆變りありません。常に健康に注意して學業を勵み、修養を積み、立派な成績をあげることが世の父母のひとしく望む所であります。私達は常にこの心を體して衛生に注意し、身體の鍛鍊につとめ、銳意、學業に勵み努め、常に父母教師の訓誡を身にしみて守りもつて父母の心を安んずることを心がけねばなりません。父母の膝下を離れてゐる者は、絶えず父母の安否を尋ね、自分の動靜を告

愛敬の念

げることが其の心を安んずる所以であります。

次に愛敬の誠を以つて父母に事へるものは、常に父母の命に悦服し、其の日常の起居動作にこの誠が自らあらはれて來ます。朝夕の禮や、外出歸宅の際などの正しい挨拶や言葉遣の上の注意などは、その一端であります。そしてこの敬愛の念から生れ出づる禮こそは、やがて私達の社會生活に於て一般に人々の徳を敬慕し、互に禮讓を以つて相接する態度の根柢となるものであります。

私達は常に父母の訓誡や命令に對して従順でなければなりません。未だ物の道理を廣く解せず又世の中の經驗に狭い私達は、時に父母の命令にあき足りない不服を感じ

親の心子知らず

たり、或はその訓誡が徒に私達若い者の自由な行動を束縛するものであるかのやうに考へることがあります。然し父母は長い年月の間この世の荒波をくぐつて來たもので、私達より遙に多くの經驗を積み、又世事に通じて居るのであるから、その命令に不服を感じるのには私達の淺はかな心の致す所であります。ひたすらに其の子女の幸福を希ひ、其の子女を愛するまごころから迸り出た父母の希望を裏切るが如きは所謂親の心子知らずで、思はざるも甚だしいものであります。

身體髮膚之ヲ父母ニ受ク、敢テ毀傷セザルハ孝ノ始ナリ。
身ヲ立テ道ヲ行ヒ、名ヲ後世ニ揚ゲ、以テ父母ヲ顯スハ孝

ノ終ナリ。(孝經)

樹靜カナラント欲スレドモ風止マズ、子養ハント欲スレドモ親待タズ。(韓詩外傳)

明治天皇御製

ひとり立つ身になりぬともおほしたてし

親のめぐみを忘れざらなむ

第八課 我が師

師の恩

學校は私達に取つて第二の家庭であり、教師は私達に取つて精神上の親であります。家庭にあつて父母が私達を慈み育て、下さつたと同様に、未だ西も東も十分にわから

ない私達を受け取つて今日まで教へ導いて下さつた多くの先生方の心勞や骨折を考へますと、其の師恩は決して一通のものではありません。

今私達はこの學校で、校長先生や級主任の先生を始め、多くの先生方の御指導をうけてゐます。皆私達の品性を陶冶し、各種の知識技能を授けられ、私達の身心を鍛鍊して、私達をして立派な婦人、よい日本人たらしめようとして熱心に教へ導いて下さいます。恰も家庭にあつて、父母が常に私達の體に過なく生長して行くことを念じて、様々に心配すると同様に私達の先生は、其の教子が一人でも道を踏み迷ふことなく、有爲有能の人物になる様にと萬事に心を配

師恩に報ゆる
道

つて下さるのです。私達はそのまごころに心から感謝せずには居られません。

私達が親に對する最大の道は親の心を安んずるにあると同様に、常に私達の將來を思ひ私達の教養に全力を盡されてゐる教師の意を體して其の心を安んずることが生徒としての第一の務であります。そのためには先づ教師の訓誡を十分に守り其の命令に心から従ひ我が心身の鍛錬にいそしみ品性の修養に力めねばなりません。教師の命を守るといふことも、唯形だけ命を守るのでは、決して其の意を安んずる所以ではありません。眞に教師の意を安んじ其の鴻恩に報いやうとするならば、よく教師の訓誡や命

教師を信頼せよ

令の目的を知りその目的に添ふやうに之を守つて行かねばなりません。教師が時に私達を叱責するのも、私達の將來を思ひ、學校の名譽を思ふまごころから出るのであつて、私達を愛すればこそ叱もし責めもするのです。これに對して我意を張つたり、教師を怨んだりするは思はざるも甚しいものであります。

私達は何事にも教師を信頼し敬愛の念をもつて之に接しなければなりません。自分の思に餘ることがあるならば事大小にかゝらず教師に相談して途を誤らない様にならねばなりません。どこまでも教師を信頼して隔を作らないやうにすると共に敬愛の念を失つてはなりません。

かりそめにも教師に對して之を非難したり、陰口をきいたり、不遜の態度で接したり、或は淺はかな心から、生徒としてあるまじき言動をなすやうな事があつてはなりません。近頃の學校の生徒は何となく教師を煙たがり、或は自分の悪い所を見られまいとして力めて教師から離れようとする風があります。殊に女學校に多い傾向です。これ全く教師の心持を理解しないもので、師弟の本義をあやまるものであります。

舊師に報ずるの道

教師に對する道は決して私達が學校に在る間だけの問題ではありません。卒業後もその成業が一に師恩によるものであることを忘れてはなりません。父母が雪の朝、雨

今の學生の誤つた態度

の夕べ、折ある毎に他郷にある子女の身上を案ずるやうに教師も我が教へ子の卒業後社會に出て常事なかれと祈り、その成功を我が事のやうに楽しんで待つて居られるのであります。私達は嘗て教をいただいた舊師に對しても常に其の鴻恩を偲び、音信を怠らず、折ある時には親しく之を訪れて舊時を談り、その心を喜ばせるやうに心がけねばなりません。

一般に今の學生は教師に對する考が輕薄になつて居ります。昔は「七尺去つて師の影をふまず」とさへ言はれたものです。勿論昔と今とは時勢が變り教育の方法も全然變つたので、昔の儘の禮を今に墨守することは出来ませんが、

それは形の上の問題であつて、師に對する尊敬と信頼の念とに於ては今と昔と何等かはるべき道理はありません。

第九課 感謝と奉仕

共存共榮

「旅は道づれ、世は情」といふ諺がありますが、社會は共存共榮であつて、私達の心身の今日あるは、實にこの共存共榮の社會の賜物であります。古來佛教では四恩とて、天地國王、父母及び衆生の恩を説いて居ります。國家の恩惠、父母の恩誼はいふまでもありませんが、猶靜に考へて見ますと、私達はこの社會生活に於て思はぬ人や、思はぬ物から直接間接に恩を受け惠にあづかつてゐることが、非常に多いので

四恩

報恩感謝の念

あります。今日の私達の生活はその衣食住から勉學修養の道に至るまで、そのあらゆる方面に亙つて、この社會に共に働く衆生の恩惠なくしては、考へることの出来ないものであります。君國の恩、父母祖先の恩、師の恩、親戚の恩、朋友の恩、社會衆生の恩、かう考へて見ると私達は周圍のあらゆる人々から、あらゆる方面に亙つて、各種の恩惠を受けて居るのであつて、私達はこれ等の恩惠に依つて今日の生命があり、今日の活動が出来るのであります。従つて私達は常にこの宏大な恩惠を忘れることなく、日々報恩感謝の念を以つて活動しなければなりません。一身をさゝげて世の爲、人の爲に盡す心掛がなければなりません。「喉元過ぎ

感謝の生活

れば熱さを忘る」とは、とかくあり勝な人情の弱點であります。忘恩は人の子の最大の罪であります。されば貝原益軒も「恩を感じると、恩を忘る」と、これ君子小人の由つて分るゝところなり。恩を知ると、恩を知らざるとは、これ人と禽獸との由つて分るゝところなり」と訓へて居ります。

つゝましく感謝の至情を捧げる人には、不平不満がありません。自分がかうして働けることを有難いと思へば、一碗の飯にも、一杯の水にも感謝の心が漲ります。他家を訪問して優遇されようと思へば、御馳走のないのが不満になります。が、何の求める所も無ければ、一杯の茶を恵まれても感謝の念は起りません。

今日もまた箒取る手のうれしさよ

はかなくなりし人に此べて

何といふ謙虚な心でせう。病床に横つて悶々の間にその日を送り働きたくも働き得ぬ我が身の不遇をかこつ人あることを思へば、健康で働くことの出来るといふことが如何に感謝すべきこととせうか。私達は常にかうしたつゝましい氣持で生活したいものです。日夜感謝の念を以つて、萬事に我儘、放恣な振舞をさけ、念々に進徳の工夫をこらし、學業の習熟に勉めるのが、今の私達の最大の報恩の道であります。

社會奉仕

社會の共存共榮の實をあげるには、私達は唯消極的に受

我が國民の社會奉仕の念

けた恩誼に報ひるだけでなくて、積極的に社會公共のために盡さなければなりません。自ら何物をも求める所なく、又他から強制される所もなく、自發的に進んで社會公共のために盡す精神を社會奉仕の精神といひます。古來我が大和民族、我等の祖先が、常に一身一家を顧みずして君國のために盡して來た赤誠は、最も純眞な社會奉仕の精神の發露であります。殊に家庭生活に於てこの純眞な奉仕の精神が至る所に發揮されたのは、日本婦人の誇であります。日本婦人の典型と言はれる乃木將軍夫人の一生は、實に清らかな奉仕の一生であります。私達はかくの如き女性を我が民族の一人に持つことを誇とすると共に、私達自身が

わが國民には社會奉仕の念が足りない

この精神を益々發揮して、社會公共のために盡す覺悟を持たねばなりません。

由來我が國民は家と國家に對する道に於ては特に優れてゐるけれども、其の他の一般社會に對する理解が少く、公共の精神、公德心に乏しい憾があります。私達は勿論我が家、我が學校のために盡し、君國のために赤誠を披瀝しなければなりません。更に一般社會生活に於て共存共榮の實をあげること、に努めねばなりません。私達の社會が平和な住心地のよい社會となると否とは、一に私達のこの奉仕の精神の大小によるともいふことが出來ます。ロンドン郊外にはイギリス貴族の宏大な邸宅が澤山ありま

すが、皆廣やかな清楚な庭園を通り抜け道を作つて、市民の散策に供して居るといふことです。勿論我が國とは住宅の構造を異にして居るので、我が國民が今直ちに之を眞似ることは出来ぬことですが、この精神はどこまでも私達の模範としたいものであります。

奉仕の價値は
事の大小には
よらない

奉仕の價値はそのつゝましやかな精神にあるのであつて、事柄の大小や、結果をもつて論ずることは出来ません。大資本を募つて大慈善病院を建てるのも、一錢も投ぜずして、風雨に壞れた小路を繕ふのも奉仕の意義には何等かはりはありません。校庭に散る一片の紙屑を拾ひ路傍に捨てられた硝子の破片を片付けるのも亦立派な社會奉仕の

今の私達には
どんな奉仕の
仕事があるか

精神であります。

第十課 寛い心

明治天皇御製

あさみどり澄みわたりたる大空の

ひろきをおのが心ともがな

人過の無い者はない。我が周圍の人々に色々缺點があり、過があると同様に、我が身にも缺點があり過があります。他人の缺點や過は、我が身のよい鑑戒であります。私達はともすると我が身の反省を忘れて他人の缺點にのみ目をつけ、我が不行届は棚に上げて他を責めやうとします。こ

寛い心

他人の過は我が身の戒め

れは我が顔の汚に氣づかないで、他人の顔の汚を笑ふと同様です。私達は人の缺點に氣付いたら顧みて自ら戒め、自らその轍を踏まないやうに氣をつけたい。徒に人を責める者は、自ら反省することを知らない者か、若しくは我が心を欺いて善人ぶる者であります。「春風をもつて人に接し、秋霜をもつて自ら肅む」とは、私達修養に志す者の服膺すべき教訓であります。

他人の過に對する道

心を寛く大きく持つといふ意味は、悪を悪とせぬことではありません。悪はどこまでも悪であります。悪を悪とせず、之を放任するは、良心を麻痺させるに過ぎません。我が過たると他人の過たるとにかゝはらず、悪は悪として之

理解ある同情

を是認してはなりません。けれども自ら内に顧みる所なくして徒に他人の小過を酷しく責めることは、却つて對手に憎惡の念を抱かせ、時には反抗心を起させるだけで、眞に對手をして自ら反省し、善に遷らしめる所以の道ではありません。我が友の過を知つたならば、よくその事情を詳にし、友の氣持を考へて、出来るだけ之に同情し、靜にその反省を促して自ら悔い改めるやうにさせたい。そして何時までも過去の過に執着することなく、我が身にも又時にかかると過あるべき事を思ひ、共々に手を取つて正しい道に進みたい。無理解な詰責は私達の氣持をかたくなにし、却つて反抗心を抱かせるに過ぎないが、心から私達の心事を理解

し、自ら悔む我が心持に同情して呉れる誠意ある寛容は、私達の良心に取つて最も強い詰責であります。昔から「情に向ふ双なし」と言はれてゐます。

十人十色

此の世は自分獨りのものではありません。多數の人々が互に譲り合ひ助け合つて、始めて平穩な社會生活が營まれるのであります。然も人は十人十色で、各々その性質や境遇を異にし、過去の經驗や教育を異にしてゐます。従つて周囲のすべての人が、自分と同じ氣分であり、同じ考へ方をし、同じやうに行動することはあり得べからざる現象であります。しかも自分の行き方、考へ方が、必ずしも唯一の正しい道とはいへないから、勝手に自分をもつて人を責め

てはなりません。私達はたとへその行き方、考へ方が異つても、徒らに非難したり嫉視したりするやうなことなく、お互に相互の立場や事情を理解し合ひ、お互に話し合つて行きたいものです。僅かのことでお互に氣にしたり、咎め立てをしたり、理非を争つたりしたのでは、到底この社會を平和に楽しく進めることは出来ません。

女性と嫉妬猜疑

心の狭い者は、とかく他人の成功や幸福を見ては之を妬み、その些細な取るにも足らぬ、缺點を指摘しては之を非難したり、或は徒に我が身をはかなんだりします。友人の成績が自分より優れてゐるために之に難癖をつけたり、或は昔の我が友の出世を見て其の一面を嘲笑するやうなこと

は私達のよく見受ける所でありませんが、實に見にくい淺ましい心構ではありませんか。私達は、我が友の成功を我が誇として共に喜び、我が學級に成績の傑出した者のあることを我が級の榮譽と思ふことの出来るやうな、寛い裕な心持になりたいものです。又わづかの意見の相異から對手の心事を疑ふが如きも、我が修養の至らぬことを告白するものであつて、まことに恥づべき心であります。殊にこの狭量猜疑嫉妬は私達女性に通有の缺點として、昔から戒められて來たものでありますから、私達はつとめて卑屈な狭小な氣宇を去つて、光風霽月のすがすがしい氣持を養ふことに努めたいものです。

第十一課 自然に親め

自然は人生の素地である

自然に親む心

自然は人間の母であり、人生の素地であります。人類は自然を利用し、之を征服することによつて、今日の偉大なる文化を建設して來たのであります。私達の自然に對する態度は、之を征服し之を破壊するに止りません。寧ろ自然に手を觸れず、自己を虚しうしてその大自然の懐に入り込み、自然に親むことに依つてよい尊い人生を見出すことの出来る場合があります。自然に親むことの出来るものは幸であります。人生に於ける偉大なるもの、尊きもの、美しきもの、凡てを、私達をめぐる自然の中に見出すことが出來ます。もとより自然には何等の意志も、何等の技巧もあ

自然の變化と
生氣

偉大なる自然
の姿

りません。然も私達は自分を虚しうして自然の懐に入り
之に親む時その偉大なる姿、尊い姿に自ら心うたれて、人の
世にまれなる教訓を得ることが出来ます。

春夏秋冬の四時の變遷は、永久にその順序をかへること
なく、年々歳々その同じ姿を私達の前に展開しながら、常に
新しい生氣に溢れ、少しの單調も惰氣もありません。私達
は常に新しい希望と歡喜とを以て、この自然の推移を迎へ
ることが出来ます。悩める者は自然の懐に慰められ、怒れ
る者はその溫情になだめられ、失望の淵に沈む者もその偉
大なる姿に自ら振ひ起ちます。

曉の光は人生に希望を語り、朝風は私達の心身を緊張さ

尊い自然の力

せます。早朝に起き出でて、夜の闇が地上の疲をいやして
過ぎ行くあとに輝きそめる爽かな朝の光を迎へ、天を仰ぎ
地を見つめて御覽なさい。冬の朝、嚴乎たる父を偲ばせる
やうな太陽、夏の朝、萬物を征服する偉力を思はせるやうな
力強い曙光、さては春の朝、慈母の至情を偲ばせるやうな柔
い朝暎、秋の朝、神秘の殿堂の扉を開くやうな紅の天日の前
に立ち出でて、靜に思ひ、深く祈る時、私達の心に何の不滿、何
の不平がありません。唯感激の情と、満足と、力強さとが油
然として湧いて來るではありませんか。
やくが如き炎熱も去つて、涼風天地にみなぎる夏の夕、さ
ては露深き草叢にすだく蟲の聲の千々に亂れる秋の夕な

カント(一七
二四一八〇
四)
獨逸の大哲學
者

ど、靜に晴れ渡つた無限の天空にきらめく星影を仰ぎ見る時、如何に崇高の感が胸に迫ることとせうか。純潔と崇高とは、星の光の持つ魂であり、見る人々の心を之に依つて淨化せずには置きません。されば大哲カントも、常に驚異と尊嚴との念をもつて迎へることの出来るものは、我が上にありては星ある空、我が内にありては「道德法」と賛嘆して居ります。私達は邪心、邪念に襲はれた時、心を落付けて自然を見、自然の聲に聽かなければなりません。自然の偉大さ、自然の尊さ、自然の美しさを心の糧カモにして進む時、私達は誤なく尊い人生を歩むことが出来ます。

遠足や登山は、私達の身心の鍛鍊に最もよいものであり

遠足や登山は
自然に親むよ
い道

ます。そして又自然に親むに最もよい機會であります。晴れた一日を親き友達が相語らひ胸一杯に大氣を呼吸しながら沿道の風物に耳目を喜ばせ、お互に何のわだかまりもなく、心から共に語り、共に歌ひ、身の疲れも覺えず知らず識らず目的地に達して溪流のほとりや緑の木蔭に憩ひ、或は汗拭きく山路を登つて其の絶頂を極め、脚下に開けた自然の眺望をほしいまゝにしながら持參の辨當に舌鼓を打ち、落葉をくぐつてかすかに流れる清冽なる泉に喉をうるほす時、私達の胸に何の邪心がありません。何の打算がありません。そこには名利もなければ得失もなく、嫉妬もなければ猜疑もなく、一點私心のないすなほな本心と、内にあ

自然は偉大な
る藝術心を生
ませる

ふれる若き日の喜びと、自然に對する敬虔の念とあるのみ
てあります。利害の打算に動くことあまりに多く、虚榮や
誘惑に迷はされることのあまりに多い人の世に取つて如
何ばかり尊い氣分でありませうか。

心を虚しうして自然に對する時、一枚の木の葉にも、微な
日の光にも、一莖の草花にも自然の尊い影を認め、偉大なる
力を感得することが出来ます。そして其の前に敬虔の念
にうたれてひれふす心に、尊い純眞な藝術の花が咲き、剛健
な藝術の實が結びます。

山路来て何やらゆかしすみれぐさ 芭蕉
心なき旅人が、草鞋の端に踏みにじつて顧みないやうな一

自然に親め

莖のすみれにも、自然の偉大なる力を感得することが出来
ます。

自然は人間の生活に無限の資料を與へて呉れます。自
然は又無限の教訓を秘めてゐます。自然をよくみつめ、自
然の懷に飛び込み、自然の心を心として進む所に、より尊い
豊かな人生が生れます。私達は出来るだけ自然に親み、自然
の偉大な教訓を身につけて進ませう。

第十二課 實力を養へ

立派な成績を作るといふことは、學生である私達に、最も
大切な當面の務であります。農夫が豊かな秋の取入れに、過

實力と成績表

ぎ來し一年の苦しい努力も忘れ、雪の朝、嵐の夕の辛苦もすべてを忘れて、其の農作を喜び祝ふやうに、私達に取つては學年末に立派な成績を手にするこの出来るのはこの上なく喜ばしい又楽しい事であります。唯忘れてならない事は、私達の毎日の勉強は我が品性の修養向上をはかり、我が實力を養ふための勉強であつて、決して唯多くの點數を取ることが最後の目的ではないといふ事であります。立派な成績表は、私達の不斷の努力の結果であり、私達の實力の證明としてこそ尊いのであつて、私達の努力、私達の實力を離れて成績表その物が尊いのではありません。

世の中にはこの道理をはきちがへて、學生の本分を誤る

誤つた考へ方

者が少くありません。自分の實力は棚に上げて置いて、成績表だけを立派にして得々としてゐる學生があります。かういふ學生は平素決して眞面目に勉強いたしません。甚だしい者は、他人の勉強を妨害したり、友達の眞面目な勉強をからかつたりして、遊び連れを作らうとします。こんな學生に限つて、試験前などには家事の手傳も抛り出し、夜も十分寝ないで眼を赤くして勉強します。そして偶々よい點が得られると得々として之を人に誇ります。又かういふ學生は苦しくなると、試験の際などに不正な方法を取らうとします。いづれにして最もいやしむべき考であります。

死んだ勉強

さりとして又、眞の理解といふことを考へないで、顔色を蒼くして常に机の前にばかり坐つて勉強してゐる學生がおりますが、これ亦眞の實力を養ふ所以ではありません。かうして得た試験の成績がよくとも、それは死んだ成績であつて少しも誇るに足りません。かういふ學生は、自分の力で考へ、眞に理解することに努めなくて、唯機械的の暗記を以つて勉學の目的が達せられるものと考違をしてゐる者です。されば教へられた問題や教科書にある事柄は、よく知つてゐるやうですが、其の實、眞に理解された生きた力となつてゐないので、應用問題に當つては少も頭が働かず、折角學問をして、之を實際に役立たせることが出来ません。

今が最も大切
な時機

學校ではいつもよい成績を取り、教師にほめられてゐる者が、一旦社會に出て獨立して働かねばならぬやうになると一向に働けない者があるのは、かうした死んだ學問をしてゐるからであります。

私達が學校を卒業して世に出る曉には、現在の様に何事についても直接に教師の指導を仰ぐわけには参りません。矢張自分の力で自分の道を開き、自分で種々の問題を解決しなければならなりません。その時になつて眞に役立つものは一片の成績表ではなくて、實力であります。物事を自分で考へて解決する力であります。かういふ實力、かういふ思考力は、この比較的短い在學期間を除いては容

易に養ふことが出来ません。今の私達は年も若く、元氣もあるし、頭も最も鋭敏に働く時であります。出来るだけ自分の生來の才能を伸ばして、生きた學問を身につけ、實力を養ふに努めねばなりません。

第十三課 生きた學習

眞の實力を養ふにはどうしたならよいてせうか。生きた學習とは、どういふ勉強の仕方であらうか。私達は過去一年の勉學に依つて多少の經驗は得たし、又勉學の仕方についても、たえず夫々の先生方から教はつて來た譯ですから、今それを振り返りながら生きた學習の仕方について考へ

自學自習

て見ませう。

眞の學習は自學自習であります。唯教師の授ける所、教科書の記載する所を、その儘機械的に受け入れたのでは、決して生きた學習ではありません。勿論私達が學校に通ふのは教師の指導を受けるためであり、未だ知識も少く、判斷力も不十分であり、經驗も浅い私達でありますから、教師の指導を仰がないでは有効な勉學を続けることは出来ません。然し勉學については如何なる場合にも、自分で考へ自分で判斷するといふ、自發的態度が根柢にならねばなりません。教師はこの私達の自發活動を誤らない様に導いて下さるのであり、又私達の力だけではどうしても解

思考作用

決することの出来ない場合に、之を指導して下さるのです。私達が家庭にあつて幼い弟妹の相手をしてゐると、事毎に「なぜ」どうして」といふ疑問を出します。説明してやると「それから」と追及して來ます。これは私達人間が皆本來有つてゐる好奇心、求知心の表れてあります。この求知心が人間の知識を發達させる原動力です。私達が新しい事物に接して、「なぜ」どうして」と疑問を起す所に思考作用が働き出し、次第に之を解決して行くのです。何の疑問もない所に、心は働きません。私達の學習に於ても亦同様です。私達の學習が生きた學習であるためには、先づ教場に臨む前に、その時間の材料について出來得るだけ豫習を行ひ、疑問

豫習

教場での態度

を作つて置かねばなりません。これが自學自習の第一歩です。自ら内に疑問を抱いて教場に臨めば、自然雜念を去り、注意を散らさないで教師の教授指導を受けることが出來、かくて最初の疑問が解決され或は解決の暗示が與へられます。勿論この間に、明白に自分の理解に訴へてどこまでも追求し、十分に噛みしめ、尙分らぬ所があればどんな些細な點でも質問をするやうにします。若い者は自分で十分わからぬのにこんなことを質問して友達に笑はれはせぬかなど考へて、そのまゝに棄て置くことがあります。殊に女學生に多いやうです。けれどもこれは心得違も甚しいものです。諺にも「問ふは一時の恥、問はぬは末代の恥」と

いひますが、いかに些細な事にせよ、知らざるを知らずとして問ふのはすなほな心であつて少しも恥づる所はない。寧ろ恥づべきは、知らないことを知つたふりして通すことである。

復習

かうして學んだ所を、家に歸つて更に復習いたします。教場で學んだ所を、今一度考へ直して其の理解を深め、記憶を確實にし、次の學習の基礎とすることが復習の仕事であります。其の他筆記の整理をしたり、或は技能學科であるならば之を反覆練習したりすること、又宿題があるならばこれを果すことなども亦復習の一部であります。

自發活動

眞の勉學、生きた學習は決してたやすいことではありま

せん。非常な努力と忍耐とがいります。然しこの努力を拂ひ、この苦しみを嘗める自學自習の精神のない所に決して眞の學習はありません。馬を水邊に連れて行くことは誰にも出来ることですが、さて水を飲まうとしない馬に水を飲ませることは、何人かゝつても出来ることではありません。學校の設備がどんなに整つて居り、如何に立派な教師が揃つてゐた所で、其處に學ぶ學生に自學自習の精神が缺けてゐたのでは、決して眞の教育は出来ません。

生きた學習は必ずしも學校にある間だけの仕事ではありませんが、唯今は専心學習に従ふことの出来る時期です。私達は出来るだけこの好機會を逸しないやうに生きた學

習の工夫をいたしませう。

第十四課 勤勉努力

努力は成功の基

「我を才子といふ者は未だ我を盡さざる者である。我をよく刻苦すといふは眞に我を知るものである。」これ一代の文豪として知られた頼山陽の言であるが、ことに私達の味ふべき言葉であります。眞の成功は決して勤勉努力なくして得られるものでありません。不斷の努力こそは成功の健實なる基礎であり、又人生の意義であります。古來史上に其の名を留め、赫々たる功名をうたはれてゐる人々の生涯を仔細に眺めると、いづれも刻苦勉勵

血を吐くやうな苦心と努力の跡を残してゐます。

如何に天賦の才があつても磨かねば伸びません。凡庸の才と雖も緊張と努力とが事を成就させます。世の學生の中には、往々その才を恃んで、努力する所なくして通つて行くことを誇る者がありますが、誤れるも甚しいものであります。よしやそれでよい成績を得てゐるとしても、其の人格に於ては何等取るべき所がありません。勿論よい結果を得ることは望ましいに相違ないが、人生の眞の價值は仕事の結果だけできまるものではありません。不斷に向上發展を求めてやまない努力にこそ、眞に人生の價值があるのです。才があつても必ずしも誇るに足らず、才が無く

人生の價値

とも必ずしも悲しむに及びません。要は持つて生れた才を出來るだけ生かして行くやうに努力することです。生來天賦の才を恵まれぬ者は如何に努力しても天才に及ぶことは出來ぬかも知れません。しかし出來榮だけが其の人の値打を定めるものではありません。私達は何事にも、あまり出來榮に執着しないで、唯自分の爲すべき所に向つて眞面目に努力するといふ態度を養ひたい。かういふ態度にこそ其人の眞の値打があらはれ、又自然そこによい結果が得られるのであります。

學生としてよい成績を得たいといふことは誰でも望む所であります。けれども私達の平素の勉強は、あまりその

努力と成績

獨案内は使つてよいか

結果としての成績に捉はれないで、眞面目に勉強するのが學生としての私達の本分だからといふ氣持で、眞劍に努力したいものです。これが學生として眞に尊い氣持であり、又この氣持あつて眞に努力する所に得られるよい成績こそ、最も尊い成績であります。試験などに往々不正の手段を取り、學生としてあるまじき行を爲すものがあるのは、この尊い氣持を失ひ、唯成績の結果だけに捉はれるからであります。教科書を學ぶに獨案内といふやうな物も、適當に之を選べば必ずしも悪いものではありませんが、若しこの尊い氣持を失ひ、眞劍に刻苦努力するといふ態度なく、唯獨案内で其の日其の日の表面の出來榮だけにお茶を濁して

行くやうでは、次第に惰性に依つて精神が腐り、遂に眞面目な努力が出来ないやうになります。殊に積極的に、自ら進んで研究する精神は全然失はれて仕舞ひます。この事は勉強だけに限つたことではなくて、運動を行ふにしても、作業を爲すにしても亦同様であります。

團體の成績

級の者が一人／＼この精神で眞面目に努力すれば、忽ち我が級が全校の模範學級になります。そして各學級がお互に自分の學級を立派にする様に眞剣に努力すれば、この學校が忽ち天下の模範學校になります。國家にしても亦同様です。國民にこの意氣と、この眞剣さがあれば、我國はどこまでも世界無比のこの國體の精華を發揮して以つて

骨折り損のくたびれまうけ

世界の文化に貢獻することが出来ます。

こゝに唯努力といふことについて注意したいのは、努力といふことは、決して盲目的に或事に執着することではありません。何事でも之を完成するには然るべき順序と方法とがあります。この順序方法を十分に考へない仕事は決して能率を上げることが出来ず、往々世に所謂「骨折り損のくたびれまうけ」に終るの外はありません。勉強にしても唯矢鱈に机の前にしがみついてゐるのが眞の勉強ではありません。運動にしても唯多くの時間を費し、多くの力を用ふることが決して眞に運動の目的を達する所以ではありません。

天ハ自ラ助クル者ヲ助ク

第十五課 挫けぬ心

修養は一生の事

私達の修養は一生の事であります。決して學校に居る間だけとか、或は五年十年とかいふ限られた時期の問題ではありません。然も人生の行路は決して常に平穩無事ではありません。時に強い波風が私達を襲ひもしようし、又不慮の災厄に悩まされることも少くありません。かやうな場合に、いかなる艱難にも堪へ、必ず初志を貫かうとするには、一時の安逸を貪る心をふり切つて、堅忍不拔の精神を養はねばなりません。平素身心の鍛錬の足りない人には、

堅忍不拔の精神

耐久心がないので、この艱難困苦に打ち勝つことが出来ません。

一時の苦を凌ぎ、一事の難に勝つて自己を制することもたやすい事ではありませんが、長い年月の間あらゆる方面に向つて奮闘努力し、あらゆる困苦と戦ひ、遂によく最初の一念を貫くといふことは、まことに困難なことであります。然しこの挫けぬ心がなければ、決して人生の大業は成就しません。國民にこの心が缺けて居つては、決して偉大なる國民文化を建設することは出来ません。私達將來の成功と失敗との岐るゝ所も、實に今後のこの耐久心にありと知るべきです。

目的は遠きに
あり

如何にしたならばよくこの堅忍不拔の精神を以つて、長い間の艱苦に堪へることが出来るでせうか。私達は先づ目的の遠きにあることを自覺して決してあせつてはなりません。如何なる大事業でも始は微小な處から起り、先づ手近から一步／＼進んで、遂に大成されるのであります。私達は何事にも決して成功を一時に期することなく、漸次に、たえず、然も確實に進んで行く覺悟が必要です。例へば勉強するにも、或は競技の練習をするにも、成功を急いで無理な勉強をしたり、無謀な練習を爲したのでは、或は一時は成績の上ることがあつても、やがて根盡き力衰へ、遂に倦怠の心を生じ或は健康を害ねるの外はありません。私達は

身心の鍛錬

初より急がず、焦慮らず、一步／＼着實に進み堅實に歩いて、最後の勝利を期さなければなりません。

目的を遠きに望んであらゆる艱苦と戦ひ、一步／＼着實に進むためには、今の最も陶冶性に富んで居る時機に、十分に身心を鍛錬して強健なる身體と不屈不撓の精神とを養ふことが大切です。凡庸の身心を有つ者でも、たえず之を鍛錬してやまなかつたならば、遂には強健なる身體と持久の精神とが得られます。私達は進んで諸種の困難に遭遇し、ともすれば挫折勝な我が心に鞭うつて之を突破し、堅忍不拔の精神を養ふ覺悟がほしいものです。熊澤蕃山は

憂きことのなほこの上に積れかし

運動

體操競技

限りある身の力ためさんと詠みましたが、この意氣こそ今の私達に適しいものです。現在の私達が身心を鍛練して困苦に挫けぬ精神を養ふに最も近い道は、健全な運動に親むこととあります。学校の課業や課外に行ふ體操や競技は、最も合理的なもので、身體を鍛へ上げることとは、勿論、規律を守る精神、健全なる服従心、鞏固なる意志等を養ふに極めて大切なものです。殊に團體競技は共同の精神、不屈不撓の精神、責任感等を養ふに最も適しいものであります。

其の他、徒歩、遠足、登山、水泳等の如きも、その體質に應じて適當に之を選び行くならば、身體の鍛練と共に、意志の鍛練

徒歩

登山

の上にななる効果を認めることが出来ます。殊に徒歩は手輕に出來、自分の健康状態に應じて適當に範圍が選ばれ、全身運動になるので女子に最も適しい運動であります。登山も亦身體の鍛練と共に氣分を爽快ならしめ、不屈不撓の精神、雄大宏濶の氣宇を養ふに極めて適しいものであります。時代を解せぬ或者は、運動に熱心なる女子を評して「お轉婆」と非難しますけれども、つゝましい健全な運動に熱心なのは決して「お轉婆」ではありません。

過は何人にもある

第十六課 過を速に改めよ

私達は何事を爲すにも豫め事前に十分考へて過のない

過は速に改めよ

やうに注意せねばなりません。人事は極めて複雑であるから、自らは正しい事、善い事と考へて爲した事が、後で悪い事であつたと氣付く場合が屢々あります。殊に私達は今修養の途中にある者で、自らは如何に注意して進んでゐる積でも、知識が不十分であつたり、血氣にはやつて前後の事情を十分に考へる力が足りなかつたり、或は知らず識らず過去の習慣に引きずられたりして過に陥り勝であります。自分に過あることを知つたならば、言ふまでもなく速に之を改めねばなりません。若し事我が身のみに関はるのであるならば速に悔い改め、事他人に關するものであるならば、速に我が不徳を述べ過を謝すべきであります。何人

反省と克己

過をかくすな

も自ら過を望む者はありません。若し過のあつた場合には過を過として、その由つて來る所を十分に考へ、將來同一の過を再び繰り返すまいと心に誓ふべきであります。過を速に改めるといふことは決してたやすい事ではありません。殊に知らず識らず悪習に引きずられてゐる場合に之を改めることは甚だ困難です。たゞ不斷の反省と克己の精神とに依つて次第に改過遷善の効を收めることが出来るのであります。過と知つたならば氣輕に捨てなければなりません。自ら過と知りながら之を改めず却つてうはべを飾つて之を蔽ひ隠さうとするが如きは、自己を欺き他を欺くもので、過

を二重三重に重ねる所以であり、心に修養向上の努力なきことを語るものであります。たえず向上を求め修養に志す者はわが過を隠すが如きは良心の責をうけて不快に堪へない筈である。されば孔子も「過ちて改むるに憚ることなかれ」と教へてゐる。

他人の注意を喜んで受けよ

身に過あつて他人から注意を受けた場合には、喜んでこれをうけ、再び過を重ねまいと決心すべきであります。自分では過を氣付かないことも、更に修養の積んだ人から見れば過と見られることが少くありません。ですから他人が自分で氣付かなかつた過を教へて呉れたなら、感謝して之を改めることに努むべきです。身の過を忠告されて不

剛情と自暴自棄

快に感じたり、忠告されて自分も過と覺りながら之に感謝せず、甚しきは敵意をさへ抱くのは、品性下劣にして向上の精神のない小人のなす所であります。いやしくも眞摯な態度で理想を求めて進む者は、他人の好意からの注意を感謝して迎ふべきであります。

明に過と知りながら尙理窟をつけたり、言譯がましい言葉を以つて之を固執するのは、非を遂げんとする剛情であります。社会生活の破壊者であります。さりとして又わづかの過に直に自暴自棄に流れ、自ら我が前途を誤るが如きは、到底今日の世に立つて大事を爲すに足らない、意志の薄弱な者であります。理性にくらく感情に走り勝ちな女子

風習のかけに
かくれるな

には、このいづれかの態度が多いので、私達はこの點を十分に反省し、この女子にあり勝ちな缺點を改め、寛いすなほな心持で修養に努めたいものです。
更に考ふべきことは、道理の上からは誤であることが明であるにかゝはらず、社會の風習なるが故に一般に人々が心にも留めずに居ることがあります。よい風習は社會の秩序を保ち、社會生活を圓滑ならしめ、私達が安んじて日常生活を送り得るために極めて大切なものであります。現にこの社會に存在する風習は、その凡てが、必ずしも正しい善良なものではありません。明に不合理なものもあれば、今の時代には無用の長物もあります。私達は明に風習が

悪風の改善

誤つてゐると考へられる場合には、この風習にかこつけて過を繰り返すことのないやうに、お互に話し合つて其の誤を明にし、共にこれを改めて行くことに努めたい。これを怠つて自ら風習のかけにかくれて安逸を貪るのは我が社會を向上發展させようとする誠意と熱の無い者であります。學校生活に於ても亦同様です。我が學校、我が學級について、たえずお互に反省し語り合ひ、悪いと思ふ所は速に之を改め、立派な校風、善美な級風を作り上げたいものがあります。

第十七課 習慣

習慣の力

習慣の力は大きい。自分の身邊をきちんと整理しなければ氣のすまない人、その日の仕事はその日に果さないで居られない人、これ等は専ら習慣の力でありませう。同様に朝寝をする人、とかく物事を粗末に扱ふ人、これ等も亦習慣の力でありませう。私達の日常生活は大部分習慣の力で動いてゐます。そのため、身心の勞も比較的少く、時間も僅かです。私達の日常生活を進めて行くことが出来るのであります。私達の日常生活は習慣のために精神作用の上には大きな節約と疲勞の軽減が行はれてゐます。之に反して、私達が若し毎日繰返す日常生活の動作に就て、一々意識を働かせ、思慮判断をめぐらさねばならぬとすれば、私達の

良習と悪癖

生活は日常の些事に捉はれて向上發展をはかり修養に志す餘裕がなくなります。然し又一旦習慣が出来上ると、殆ど無意識に之に従つてゆきますから、之を改めるには、非常な決心と努力を要します。例へば怠惰の習慣のついた人は、後に之を悟つて勤勉にならうと努力しても、ともすれば倦怠に陥り、その難きに失望して、習慣に引かれて行きます。よい習慣はありがたいが、悪習は一生の不幸であります。私達はつとめて悪習を去り、良習を養つて行きたいものです。早起、勤勉、節約、鄭重、綿密、節制、規律、時間の嚴守、言葉遣を慎むことなどはよい習慣の例であり、之に反して朝寝、不勉強、不規律、贅澤、粗暴、不攝生などは、最も悪い習慣であります。

強い決心と不
断の努力

人は何事にも慣れ易いものであるけれども、習慣を作るには、事の善悪に依つて自ら難易の別があります。善い事は初め之を爲すに強い決心と努力とを要するのみならず、之を繰り返すに猶多くの努力を要します。蓋し私達は心して努力しなければ誘惑に負け、私利私欲にとらはれ勝のものだからです。之に反して悪しきことは、多く初より之を爲し易い。従つて之を避けることは決してたやすいこととありません。これ悪癖のつき易く、良習の得難い所以であります。

良習を作り悪癖を除くには、鞏固な意志を以つて初一念を持續し、克己の力に依つて油断なく、且たえず之を實行す

今が大切な時

ることが大切です。例へば朝寝の癖を改めやうとしたら、毎朝つとめて定刻に起きる。自分の力だけでは足りないと思つたら、父母の力を借りて實行する。かうして怠らなければ、いつか必ず定刻に醒るやうになります。最も大切なのは今一息といふ際です。長い間骨を折つたものが、一寸した氣のゆるみで、九仞の功を一簣に缺くことは、決してめづらしくはありません。一度心をゆるして良習を破れば、悪癖はそのすきに乗じて忽ちもとにかへります。

良習を養ふには自ら適當な時機があります。八十の手習は、其の意氣や壯とすべきも、甚だ困難であります。現在の私達は道德的習慣を養成するに最も大切な時期にある

者です。今の大切な時期に自堕落な悪習に染んだ者は、後年どんな機會に遭つても、之をひきしめることは難い。若い時代に贅澤に慣れた者は、後年一朝災厄に遭つて資財を失つても、速に生活程度を改め、貧に安んずることが出來ない。今の私達の時代は一生の上から見て最も重大な時期であります。自ら善と信じたことは直ちにその實行にうつり、自分の悪い癖だと氣づいた時は、未だその固定しない内に斷然と振り切つて正しい道に進みたい。今日といひ明日と云つて、徒に時日を経過すれば、いつか氣衰へ力抜けて、終生良い習慣を養ふ機會を失つて仕舞ひます。

氏より育ち

「氏より育ち」といふ諺があります。所謂人品といふもの

は、若い時代に或は家庭に於て、或は學校に於て養はれた習慣から自然に生れるものです。今の私達の習慣は、すべて將來の私達の品位や活動の基となるものであることを忘れてはなりません。

習慣は第二の天性

第十八課 小事と大事

小事が大事

百年千年が如何に長くとも、矢張一日一日の集積に外ありません。小を積んで大をなすといふことは誰でも知つてゐます。それにもかゝはらず、ともすると私達は大事の前に驚歎しながら、小事をおろそかに取扱ひ勝です。「千丈

の堤も蟻の一穴から」といふ喩のある通り、些細なことから意外の大事を惹起すことは、世上いくらも例があります。一個人の僅かな衛生上の不注意から、其の地方に猛烈な傳染病が傳播して、幾多の人命を傷ふことがあります。煙草の吹殻一つのために、幾多の家屋財産や又大森林を焦土に化し、人命にも危害を及ぼすことは決して珍しくはありません。

之に反して温い同情の一言が、逆境に沈み失望落膽の底にゐる人を奮起させることがあり、一枚の葉書が、久しく中絶してゐた友情を回復させることがあります。又一人の誠心が難治の村を模範村たらしめることがあります。

小事は小事で
終らず

一匙の鹽、一匙の砂糖は、これだけで考へれば些細なものですけれども、この匙加減一つで料理の味がかはります。教室に於ける私達の態度、日常の禮儀作法、家事の手傳など、それだけ單獨に考へれば小さい事と考へられることであつても、私達の修養、品性の涵養といふ方面から考へますと其の成行きは實に重大であります。小事は決して小事で終るものではありません。「これ位のこと」僅かのものといふて、日常の小事を忽にする者は、決して大事を成し就げる人ではありません。

今日の世界の文化に多大の貢獻をしてゐる發明發見も、多くは些細な偶然の出來事に起因してゐます。昔から何

ニュートン
(一六四二—
一七二七)
英國の數學者
且物理學者

千萬の人間が、林檎の落ちるのを見て別にあやしまなかつたのに、ニュートンは之を機縁にして、遂に引力の法則を發見したてはありませんか、發明家が常人と異なる所は、僅かな端緒を遁さず捉へ、之を仔細に觀察して、そこに獨創の精神を發揮する所にあるのです。

昔から小事を侮つて大成した者は決してありません。私達が偉人や大學者、大藝術家などの傳記を繙くとき、如何に彼等が皆小事を忽にせなかつたかを知ることが出来ます。殊に學者や藝術家に至つては、小事に忠なるがその本領であります。小事を看過する學者は、一つの研究をも完成することが出来ません。瑣細なる自然の一點に大自然

芭蕉

の神心かみこころを見出すことの出来ない藝術家は、決して傑出した作品を残すことは出来ません。

山路來て何やらゆかしすみれぐさ

芭蕉

あな尊と青葉若葉の日の光

芭蕉

枯枝に鳥のとまりけり秋の暮

芭蕉

かうした情景は、凡人が日々眼にしながら心なくして通る自然の姿ですが、そこに神心を見出し得た芭蕉にして始めて俳聖の名にそむかないのであります。

名人と呼ばれた中村仲藏がまだ藝が未熟で、藏衣裳くわいしやうの素袍すわうで、並び大名に出てゐた頃のことです。糊かで固めた麻の素袍のことですから二三日着ると皺しわになります。他の役

中村仲藏

脚下の修養

者は樂屋に入るとそれを脱ぎ捨て、置くが、仲藏一人は、脱ぐ度に素袍に水を吹き、叮嚀に疊んで置いたので、舞臺に出て並んだ時、折目がすつきり立ち、一際立派に見え、ひいて藝もひきたつて見えました。頭取も「これは見所がある」と思つて、次の芝居には自然よい役を當てる。相當につとめるので、又よい役を當てるといふ風にして、遂に名人の域に達したのであります。

私達の日常の勉強や修養についても、これとかはりはありません。私達が一日一時間に學習する内容は極めてわづかの量であります。けれども、その日／＼の豫習復習をおろそかにし、其の時間／＼の授業に緊張しないで眞の實

力は決して得られるものではありません。修養についても私達の爲すべきことは脚下に澤山あります。この脚下の修養を忽にする者よ到底立派な品性を形造ることが出来ません。

第十九課 明い心

紫匂ふ横雲を破つて東天にさしのぼる旭光の麗さを見て、誰か晴やかな明い心にならずに居られませうか。私達はいつてもかうした明い晴やかな氣持で、この人生を送りたいものです。

陰鬱な心持は病弱な身體に基くことがあります。身體

明い晴れやかな心

健康と氣分

が健康で、はち切れるやうな元氣に満ちてゐるものは、いつでも人生を明るく見て行きますが、身體の病弱な者は何事も意にまかせず、何物を見ても何事をしても不愉快で、晴々した明い氣分になることが出来ません。私達は常に健康に注意し、あふれる元氣で事に當り、明い人生を送りたいものです。

心の持ち方と
其の影響

私達の氣分が健康状態に依つて左右されることのあるのは言ふまでもありませんが、愉快な人生を送るか、不愉快な人生を送るかは、寧ろ私達の心の持ち方によることが多いといふことが出来ます。常に人生の明い方面を見て進んで行く人は、いつも晴やかな心、明い氣分でこの世を渡る

ことが出来ます。之に反して、人生の暗い方面を見つめ、不遇な境遇にのみこだはる者は、いつも陰鬱なじめくしたなやましい氣分でこの世を送ります。

いたづらに我身をかこち人の世を呪ふ者は單に自分が不愉快なばかりでなく、周圍の人々の心をもくもらせ此の世の暗い影を益々大きくすることになります。私達が太陽に直面して立つ時すべての暗い影は背後に退き私達の面前にはたゞ光明と希望の外何物もありません。同じ様に明い心をもつた人々の周圍には常に輝かしい希望の者があふれそこに活氣にみちた新しい社會が築かれて行きます。

足るを知る心

愉快な人生、明い人生を、暗い不愉快なものにするのは、あまりに浮雲のやうな物質に捉はれ過ぎて、我が身に恵まれたものを感謝する心が無いからです。物質欲がはびこり出せば際限がありません。派手な洋服がほしい、上等のパラソルがほしい、あの肩掛も欲しい、此の腕時計も欲しいと、それからそれと欲望は伸びて行くが、さう自由になるものではない。そこで不満があり、不平が起り、自然に不愉快な曇つた心になるのです。足ることを知る者は、心が常に平静ですから明い氣分で世を渡りますが、足ることを知らない者はいつも不平があり、煩悶があります。足ることを知る者は今日の恵を感謝しますが、足ることを知らない者は

感謝の心

常に人を羨み、我が身をはかなみます。錦を着ても、満足する心、感謝する心のない者には幸福はありません。襤褸を着ても、心の満足を知る者、感謝の心を知る人は、綾絹の衣を身に纏ふと何のかほりもありません。病苦に悩む友のあつたことを思へば、我が身の健康が感謝されます。又病を得ても淋しい野道で行倒れる人もあり、痛む頭、苦しい胸を抱いて人に憐を乞はねばならぬ者もあることを思へば、静に床の上に療養することの出来るこの身を、心から感謝せずには居られません。この感謝の心を忘れぬ人は、豊かな明い心で、人生を愉快に送ることが出来ます。

又内に顧みて疲しい所のある者は、常に人を恐れ、自分の

まごころ

腹心をさらけ出して人に接することが出来ないで、知らず知らず心が僻み、陰鬱な暗い心になります。之に反して内に誠があり、行に表裡のない者は、いつも自分のすべてをさらけ出して人に接することが出来るので、常に明い晴やかな氣持で世を渡ることが出来ます。

明い心と暗い心

明い晴やかな心を持つ人は、心にわだかまりがなくて、その言葉も態度もはき／＼として居り、常に元氣に充ちてゐます。かういふ學生は教室にあつても、運動場にあつても、其の眼に希望の光が溢れ、常に周圍の人から慕ひなつかしまれて、自然級の中心點になつて行きます。之に反して、心に不平不満があり、嫉心ねたみしんや妬心ねらみしんのある者は、見るからになや

ましげであり、其の言動に元氣がなく、打ちとけて共に語り共に遊ぶことが出来ないで、周圍の人が次第に遠ざかつて行きます。休みの時間に、校庭の隅の方に呪はしさうな面持で、同窓の楽しさうに遊んでゐるのをひや／＼かに眺めてゐるやうな者がこれであります。

明い晴やかな心があれば、いつも春風駘蕩ののび／＼した人生を送ることが出来ます。私達は明治天皇の

さしのぼる朝日の如くさわやかに

持たまほしきは心なりけり

と詠ませ給うた大御心の程を服膺して、旭日の如き爽やかな心境に立つて働きたいものです。

第二十課 誠

誠

誠とはいつはらない心、神の前にひれ伏してつゝしみの袂をかきあはせる心であります。何事をなすにも常に良心の命ずる所に従ひ、自らをも他をも欺かない眞剣な心がまごころであります。

天空海闊の心

誠なる者は自分の爲すべき事と知れば必ず之を行ひ、爲すべきでないこと知つたことは必ず之を避けます。その言ふ所に偽がなく、その行ふ所に蔭日向がありません。従つて内に顧みて疚しい所がないから、いつも心の中が天空海闊であり、何の煩惱もなく苦惱ありません。私達はかういふ人の前には、自分のすべてをさらけ出すことが出来ま

誠は一切の徳
行の基

す。之に反して内に誠なき者は、常に己を欺き人を欺き、其の行に表裡があり、其の言行が常に齟齬します。そこで強ひて我が非を蔽ひかくさうとして、少しも自ら安んずる所なく、不快に苦められます。私達はかゝる人の前では常に心に警戒しなければならぬので、喜んで共々に進むことが出来ません。

誠は一切の徳行、一切の善事の根幹であります。誠をもつて君に仕へるは忠であり、誠をもつて親に事へるは孝であります。朋友に接するに誠をもつてすれば信であり、誠をもつて我が仕事に當るは職務に忠實なる所以であります。其他正直といひ、勤勉といひ、親切といひ、感謝といふも、

内に誠なきは
偽善なり

皆誠の一字より生れるのであります。勿論行爲の外形だけについて見れば、まごころなしに同じやうな行爲をなし得ないでもありません。虚榮、利益、勢力擴張等のために、その心事を知らない他人からは善行らしく見える行も出来ます。然し内に誠なき行爲は、表面如何に立派に見えても畢竟偽善であります。同じ寄附行爲についても、眞にその事柄の價值を認めて喜んで寄附する者と、唯我が名を賣らんがために我が勢力を擴張せんがために公益事業や慈善事業に寄附する者とあります。前者はまことの善行であるが、後者は己の虚榮心を満足させるために道德を道具に使ふさもししい心であります。されば明治天皇は軍人に下

澁川流の極意
澁川流
澁川伴五郎の
創めた柔術の
流派

し賜つた勅諭の中に「心誠ならざれば如何なる嘉言も善行も皆うはべの裝飾カサネにて何の用にかは立つべき、心だに誠あれば何事も成るものぞかし」と宣ひ、又御製にも
夫時遅きたがひはあれどつらぬかぬ
ことなきものは誠なりけり
と詠ませ給うたのであります。誠は實に衆徳の根源であります。
「知らざるは知らずと云つたがよい、負けたら負けたといふがよい。わるかつたと氣がついたらあやまることだ。勝たうと思つたら、自分の弱點をすつかり曝け出さなければ眞に勝てない」。これは澁川流の柔術の極意だといふこ

駭引をするな

とです。まことに何事によらず、すべてを曝け出して、唯一つのまごころをもつて當る所に眞の成功が得られるのであります。世には往々、駭引おびきをもつて成功の秘訣となし、處世の良法と考へる者があります。然し駭引には虚偽が伴ひ、とかくその手段が陰險になります。駭引を考へる瞬間に既にまごころは失はれてゐるのです。一時は満足を得ても、早晚駭引は曝露します。かくて世の信用を失ひ、自ら失脚する他はありません。

誠は天の道

私達が一切私心を捨て、すなほな生一本に立ち歸る時、そこには唯まごころだけが残ります。このまごころは誰にもあります。唯時に忘れられ、又何等かの邪念に暗まされ

孟子

れてゐるのであります。されば孔子も「誠は天の道なり、之を誠にするは人の道なり」と教へてゐます。まごころをくらます邪念とは、目前の利害、虚榮、其の他諸種の誘惑がこれであります。これ等の邪念にくらまされず、毅然として自分の所信を行ふためには、大勇猛心が必要です。孟子の所謂「富貴も淫する能はず、貧賤も移す能はず、威武も屈する能はず」といふ、大丈夫の心あるものにして、はじめてよく一切の邪念に打ち克ち、一つ誠心を貫くことが出来るのであります。

女子新修身卷二終

（以下為正文內容，文字較淡，部分可辨）

昭和三年三月三日
 文部省檢定濟
 高等女子學校修身科用



女子新修身
 全四冊

昭和二年十月廿八日印
 昭和二年十月卅一日發
 昭和三年二月二十日訂正再版印刷
 昭和三年二月廿四日訂正再版發行

卷一	金參拾參錢	卷一	金五拾錢
卷二	金貳拾九錢	卷二	金四拾四錢
卷三	金貳拾七錢	卷三	金四拾一錢
卷四		卷四	

著者 服部宇之吉
 發行兼印刷者 金港堂書籍株式會社
 代表者 原安三郎
 印刷所 日清印刷株式會社
 神田區神保町三丁目八番地

發賣所 東京市神田區
 神保町三丁目八番地
 振替口座 東京八八一五
 金港堂書籍株式會社

南松野

